

令和 5 年 6 月 15 日現在

機関番号：26401

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18H03097

研究課題名(和文)脆弱性を抱えた家族のレジリエンスを促進するケアガイドラインと教育プログラムの構築

研究課題名(英文) Developing care guidelines and an educational program to promote resilience in vulnerable families

研究代表者

野嶋 佐由美 (Nojima, Sayumi)

高知県立大学・看護学部・教授

研究者番号：00172792

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 19,520,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、脆弱性を抱えた家族のレジリエンスに注目して、脆弱性を抱えた家族のレジリエンスを促す看護ケアガイドラインを開発し、脆弱性を抱えた家族のレジリエンスを支援する教育プログラムを構築することである。本研究では、災害後における家族に焦点をあてた「脆弱性を抱える被災した家族の家族レジリエンスを促す看護支援」に関する教育プログラムを構築した。本教育プログラムは、第一部被災した家族の家族レジリエンスを促す看護支援の基盤となる知識と視点、第二部被災した家族の生活、第三部災害後における家族レジリエンスを促す看護支援から構成される、成果として冊子を作成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

病気や自然災害等の脆弱性を抱える家族は、多様な健康課題を重複して有する現状にあり、多様な場での支援が求められている。本研究によって導かれた「脆弱性を抱える被災した家族の家族レジリエンスを促す看護支援に関する教育プログラム」は、研究者と臨床家による協働体制のもと発展させていったものである。そうした点からもevidenced based nursingに位置づく学術的視点を含む研究成果であり、家族レジリエンスの視点における看護学の実践、教育、研究の発展に寄与できるものである。又病院や地域、学校などの場で活用可能な多様な健康課題、発達段階にある家族のレジリエンスを促す教育の一助になると考える。

研究成果の概要(英文)： This study aims to develop nursing care guidelines that foster resilience and to design an educational program to promote resilience, explicitly targeting vulnerable families. The study involves the development of an educational program corresponding to the “Nursing Support that Facilitates Family Resilience in Vulnerable Families Impacted by Disaster,” specifically focusing on families affected by disasters, a set of guidelines which focus on families in the aftermath of disaster. The program was presented in the form of a booklet and comprised three sections: Section I provided foundational knowledge and perspectives on nursing support, which promotes family resilience in families impacted by disasters; Section II covered the daily experiences of families impacted by disasters; and Section III focused on nursing support for promoting family resilience after a disaster.

研究分野：生涯発達看護学関連

キーワード：脆弱性 家族レジリエンス ケアガイドライン 教育プログラム

## 1. 研究開始当初の背景

災害は人々の生命や生活を奪い、安全を脅かし、「住まい」はもちろん、仕事や学び、医療、さらにはコミュニティの中で営んできた日常という暮らしそのものを奪い去る。災害による影響の大きさは、個々人のリスクに対する脆弱性によって異なり、脆弱であればあるほど災害発生直後の被害を深刻なものにするだけでなく、長期的な暮らしの再建を困難にし、次に発生する災害に対しても人々をさらに脆弱にすることが指摘されている（Wisner, 2004）。

被災した家族は、家族生活や家族関係が脅かされるほどの困難や苦悩、人生設計の崩壊、社会からの孤立などを体験していることから、脆弱性を抱えた家族として捉えることができる。脆弱性（Vulnerability）とは、身体的、精神的、社会的健康状態を害しているというリスクを持つことであり、生活環境・病気・重大な出来事の結果として、誰しもが脆弱性を持つ可能性を有すると述べられている（Aday, 2001）。また、住まいや医療・介護・福祉施設の不足もあいまって、適応困難な場所に留まらざるを得なくなり、元々抱えていた健康課題が悪化し、本人やケアする家族のストレス負荷がより強くなり、家族の力が発揮できなくなることが推測される。脆弱性を抱える家族に対して、看護者として脆弱性がもたらす家族の健康や生活への影響を理解し、家族生活の再構築を支え、家族のレジリエンスを促す看護支援を行うことが重要である。レジリエンスは、逆境に直面した時にうまく適応するプロセスであり、人々が保持し発展させることができるものである（米国心理学会, 2008）。家族レジリエンスは、家族がストレス・衝撃から回復してくる力（Walsh ら, 2006） 逆境や危機に晒された時に家族が適応し機能することができる過程（Patterson, 2002）である。障害や病気、貧困や自然災害などの厳しい状況に直面した家族、すなわち脆弱性を抱える家族は、生活の基盤としていた暮らしを一瞬にして奪われ、多様な喪失を体験すると同時に、生活や生き方、価値観の在り方の転換を余儀なくされる。看護者として、家族を個人-家族-地域の視点から捉え、直面している脆弱性がもたらす家族の健康や生活への影響を理解し、家族生活の再構築を支え、家族のレジリエンスを促す看護支援を行うことが重要である。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、脆弱性を抱えた家族のレジリエンスに注目して、脆弱性を抱えた家族のレジリエンスを促す看護ケアガイドラインを開発し、脆弱性を抱えた家族のレジリエンスを支援する教育プログラムを構築することである。

## 3. 研究の方法

本研究の目的を達成するために、以下の手順で取り組んだ

### 1) 脆弱性を抱える「災害後における家族レジリエンスを促す看護ケアガイドライン」の作成

本教育プログラムは、研究者らが開発した『災害後における家族レジリエンスを促す看護支援モデル』（野嶋ら, 2018）を基盤としている。本看護支援モデルでは、家族レジリエンスを「家族が災害およびそれに伴い体験する困難で脅威的な状況、逆境に直面したときに、それに立ち向

かい、乗り越え、状況に適応し、それを糧として再び前進していく力」と捉えており、7つの看護アプローチから構成される（野嶋ら，2018;2021）。脆弱性を抱える「災害後における家族レジリエンスを促す看護ケアガイドライン」は、7つの看護アプローチを基に、脆弱性を抱える家族や家族レジリエンスに関する文献検討による知見もふまえながら作成した。

## 2) 「脆弱性を抱える被災した家族の家族レジリエンスを促す看護支援」に関する教育プログラムの構築

研究者らが開発した『災害後における家族レジリエンスを促す看護支援モデル』（野嶋ら，2018）を基盤として導かれた、脆弱性を抱える「災害後における家族レジリエンスを促す看護ケアガイドライン」を軸に本教育プログラムの作成に取り組んだ。被災した家族の体験や被災した家族の家族レジリエンスを促す看護支援に関する文献検討、被災地支援の経験のある専門職者からの意見聴取等をふまえ、実践や教育の場で活用できる教育プログラムの最終版を構築した。

## 4. 研究成果

### 1) 教育プログラムの作成

本教育プログラムは、災害後における家族レジリエンスを促す7つの看護アプローチの概要を学ぶことを軸としている。そして家族を理解するための視点や被災した家族の体験、家族レジリエンスを促す上で重要な被災した家族の生活を理解し支援する視点について学ぶことができる内容から構成されるようにした。本教育プログラムは、「第 部 被災した家族の家族レジリエンスを促す看護支援の基盤となる知識と視点」、「第 部 被災した家族の生活」、「第 部 災害後における家族レジリエンスを促す看護支援」から構成される。

#### (1) 第 部 被災した家族の家族レジリエンスを促す看護支援の基盤となる知識と視点

第 部は、被災した家族に対して家族レジリエンスを促す看護支援を提供する際に必要な、家族支援のための基本的知識、被災した家族の体験、被災した家族に現れる心的反応、災害による健康への影響を把握するための視点に関する内容から構成される。

家族支援のための基本的知識では、家族の捉え方や看護者に求められる基本的態度、家族の特徴を踏まえた全体像を把握する基本的な視点（野嶋ら、2005）を提示している。被災した家族の体験では、災害が家族にもたらす影響、被災した家族の体験を理解するためのポイントを提示している。被災した家族に現れる心的反応では、被災した家族員に現れる心的反応-正常なストレス反応（槇島ら，2021）や被災した家族員に残り続ける心的反応-トラウマ、正常なストレス反応とトラウマの違い、精神科医療専門職の介入を要する人の特徴（金ら，2003；金ら，2006）といった内容を提示している。災害による健康への影響を把握するための視点には、災害の影響によって生じる身体的健康問題や発災時に注意すべき感染症、災害後におけるフィジカルアセスメントのポイント、災害関連死に関する内容を提示している。

#### (2) 第 部 被災した家族の生活

本教育プログラムでは、被災した家族の生活を捉え、家族が主体的に家族生活の再構築に取り

組むことができるように家族の日常生活、セルフケアの強化を図っていくことを重視している。第 部は、一般的な災害後の生活状況と、被災した家族のセルフケアの状況として把握すべき内容から構成されている。一般的な災害後の生活状況では、避難所での生活や自宅に残った際の生活、仮設住宅へ移行後の生活についての内容を提示している。被災した家族のセルフケアの状況では、十分な空気・水分摂取の維持、十分な食事摂取の維持、排泄に関連したケア、清潔の保持、活動と休息のバランスの維持、良質な睡眠の確保、孤独と社会的相互作用のバランスの維持、生命、機能、安寧に対する危険の予防、正常な家族生活の維持の内容を提示している。

### (3) 第 部 災害後における家族レジリエンスを促す看護支援

第 部では、まず被災した家族の家族レジリエンスを促す看護支援の全体像、被災した家族の家族レジリエンスを促す看護支援の目指すところ、看護支援を行う上での留意点について論じている。そして第 部の核となる被災した家族の家族レジリエンスを促す7つの看護アプローチを構成する看護ケアを示している(野嶋ら, 2018)。7つの看護アプローチは、東日本大震災や豪雨災害の際に支援活動を行った経験のある専門看護師・看護師・保健師・助産師・養護教諭、家族看護のエキスパート看護師、災害看護や被災家族の家族支援に関心を持っている専門看護師・看護師・訪問看護師・保健師を対象にした複数のインタビューによって導かれたものである(野嶋ら, 2018)。本教育プログラムでは、各アプローチに含まれる「看護ケア」を示しており(表1)より実践の場で活用できるよう具体的な看護援助行動についても提示している。また看護実践においては、家族のおかれている状況の理解が不可欠であることから、7つの看護アプローチごとに、家族の状況や看護者に求められる姿勢の特徴についても提示している。

表1. 被災した家族の家族レジリエンスを促す看護支援の7つの看護アプローチを構成する看護ケア

7つの看護アプローチ	看護ケア
1. 家族のなかに浸透していく	1) 被災した家族の揺らぎをありのまま認め支持する 2) 家族を全体として捉えて家族のニーズを探る 3) 問題に家族が取り組める時を待つ
2. 崩れた基本的生活を立て直せるように導く	1) 家族の日常生活を調整してセルフケアに向けて支援する 2) 家族内コミュニケーションや一家族関係を調整する
3. 苦悩の連鎖が止まるように導く	1) 安心を提供する 2) 緊張やストレスを緩和する 3) 語りに耳を傾けてカタルシスを図る
4. 周囲とつながれるように導く	1) 情報提供して“外”とつながることへ動機づける 2) 地域住民と専門職とのつながりが途切れないように調整する 3) 家族自身が共助的なつながりを再構築できるよう調整する
5. 止まった時間を再び動かせるように導く	1) 未来志向へと認識が変化するよう助ける 2) 主体性をもって生きる意欲を支える 3) 被災体験や生きることの意味づけを助ける 4) 家族なりの希望が描けるよう支える
6. 立ち上がる力を発揮できるように導く	1) 被災による家族生活への影響やストレスへの主体的な対処を支える 2) 家族の自信を育む 3) 家族の意思決定を支える

7.“家族なりのかたち”に導く	1) コントロール感をもって日常性を取り戻すことを支える 2) 家族なりの絆のあり方を支える 3) 家族のアイデンティティを支えて“家族らしさ”を保つ
-----------------	---

## 2) 教育プログラムの公表・普及

本研究における成果として、「脆弱性を抱える被災した家族の家族レジリエンスを促す看護支援」に関する教育プログラム(冊子)を作成した。今後、本教育プログラムの妥当性、有効性を検討し、大学での基礎教育や大学院教育、臨床での継続教育における教育ツールとして活用できるようにさらに洗練化を図る。

### 【引用文献】

- ・ Aday, L. A. (2001): At risk in America : the health and health care needs of vulnerable populations in the United States, 2nd ed, Jossey-Bass Publishers .
- ・ 金吉晴, 阿部幸弘, 荒木均他 (2003): 災害時地域精神保健医療活動ガイドライン , Retrieved from: [https://saigai-kokoro.ncnp.go.jp/document/pdf/mental\\_info\\_guide.pdf](https://saigai-kokoro.ncnp.go.jp/document/pdf/mental_info_guide.pdf) ( 検索日 : 2022 年 8 月 3 日 )
- ・ 金吉春: ト라우マ反応と診断 (2006) . 外傷ストレス関連障害に関する研究会 金吉晴編 . 心的トラウマの理解とケア (第 2 版), じほう, 東京
- ・ 槇島敏治, 前田潤 (2021): 災害時のこころのケア第 9 刷, 日本赤十字社, 東京 .
- ・ 野嶋佐由美, 大川貴子, 中村由美, 中平洋子, 中山洋子, 中野綾美, 池添志乃, 瓜生浩子, 田井雅子, 森下安子, 時長美希, 神原咲子, 竹崎久美子, 森下幸子, 畠山卓也, 池内香, 坂元綾, 永井真寿美, 井上さや子 (2021): 「災害後における家族レジリエンスを促す看護支援モデル~ 7つの看護アプローチ~ Ver.2 ,」 ガイドライン
- ・ 野嶋佐由美, 中野綾美 (2005): 家族エンパワーメントをもたらす看護実践, へるす出版, 東京 .
- ・ 野嶋佐由美, 池添志乃, 井上さや子, 永井真寿美 . 瓜生浩子, 坂元綾, 大川貴子, 中平洋子, 畠山卓也, 中村由美, 池内香, 中野綾美, 中山洋子, 田井雅子, 神原咲子, 時長美希, 森下安子, 川上理子, 竹崎久美子, 森下幸子, 山口智治 (2018): 災害後における家族レジリエンスを促す 7つの看護アプローチ, 高知女子大学看護学会誌, 43(2), 24-36 .
- ・ Patterson, J. M. (2002): Integrating Family Resilience and Family Stress Theory, Journal of Marriage and Family, 64, 349-360 .
- ・ The American psychological Association: : The Road to Resilience on-line , Retrieved from: <https://www.apa.org/> ( 検索日 : 2022 年 9 月 28 日 )
- ・ Walsh, F. (2006): Strengthening Family Resilience ( Second Edition ) . 3-26 . The Guilford Press New York .
- ・ Wisner, B., Blaikie, P., Cannon, T., Davis, I. (2004): At Risk, Natural hazards, People's Vulnerability and Disasters, 2nd ed, Routledge, London .

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

〔教育プログラム〕 ・（研究代表者） 高知県立大学 野嶋佐由美 「脆弱性を抱える被災した家族の家族レジリエンスを促す看護支援」に関する教育プログラム（2023.3発刊）
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	中野 綾美  (Nakano Ayami)  (90172361)	高知県立大学・看護学部・教授    (26401)	
研究分担者	池添 志乃  (Ikezoe Shino)  (20347652)	高知県立大学・看護学部・教授    (26401)	
研究分担者	田井 雅子  (Tai Masako)  (50381413)	高知県立大学・看護学部・教授    (26401)	
研究分担者	瓜生 浩子  (Uryu Hiroko)  (00364133)	高知県立大学・看護学部・教授    (26401)	

## 6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	森下 幸子 (Morishita Sachiko) (40712279)	高知県立大学・看護学部・准教授  (26401)	
研究分担者	藤代 知美 (Fujishiro Tomomi) (60282464)	高知県立大学・看護学部・准教授  (26401)	
研究分担者	坂元 綾 (Sakamoto Aya) (90584342)	高知県立大学・看護学部・助教  (26401)	
研究分担者	畠山 卓也 (Hatakeyama Takuya) (00611948)	駒沢女子大学・看護学部・講師  (32696)	
研究分担者	中平 洋子 (Nakahira Yoko) (70270056)	愛媛県立医療技術大学・保健科学部・准教授  (26301)	
研究分担者	中村 由美子 (Nakamura Yumiko) (60198249)	横浜創英大学・看護学部・教授  (32727)	
研究分担者	中山 洋子 (Nakayama Yoko) (60180444)	文京学院大学・看護学研究科・教授  (32413)	
研究分担者	大川 貴子 (Okawa Takako) (20254485)	福島県立医科大学・看護学部・准教授  (21601)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	井上 さや子  (Inoue Sayako)  (30758967)	高知県立大学・看護学部・助教    (26401)	
研究分担者	永井 真寿美  (nagai masumi)  (50759793)	高知県立大学・看護学部・助教    (26401)	
研究分担者	竹崎 久美子  (takezaki kumiko)  (60197283)	高知県立大学・看護学部・教授    (26401)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関